

ジモーネ・フェスラーさんゲスト講義

「イルゼ・アイヒンガーの語る（語らない）メルヒェン」に参加して

ドイツ語圏文化論教室 2年 安倍志保

2023年5月16日に、ジモーネ・フェスラーさんのゲスト講義「イルゼ・アイヒンガーの語る（語らない）メルヒェン」に参加しました。この講義に参加する数日前、大学内で開催されていた「イルゼ・アイヒンガー生誕100周年企画展 それはイルゼ・アイヒンガーからはじまった 1921-2021 —— 語りは終末から終末へ ——」という彼女の生い立ちと作品を辿るパネル展を見に行きました。私はこのパネル展を見るまでイルゼ・アイヒンガーの名前も知らない状態でしたが、展示を通してある程度彼女の生涯や作風について知ったうえで講義に参加することができました。

講義の前半では幼少期のイルゼ・アイヒンガーに対して大きな影響を与えたメルヒェンというジャンルについて、ジモーネ・フェスラーさんから説明がありました。メルヒェンには残虐な描写も多くあることから戦後はそのような描写もナチの残虐行為の原因になったのではないかと問題視されたそうです。ユダヤ人の血を引くアイヒンガーは戦時中もウィーンに残り、親戚が殺害され、自身も強制労働に就くなど厳しい経験をします。戦後小説を書き始めたアイヒンガーはユダヤ人迫害について書いた最初の作家のひとりとなります。小説はドイツ語で書かれていますが、ドイツ語はユダヤ人にとって加害者が使っていた言葉でもあります。よってアイヒンガーは言葉を違った形で使おうとします。その結果イルゼ・アイヒンガーによるメルヒェンの新たな語りが生まれました。講義で扱ったイルゼ・アイヒンガー『より大きな希望』（小林和貴子訳、東宣出版）の「祖母の死」という章でもグリム童話『赤ずきん』の要素が見られます。講義の後半では「祖母の死」の中で『赤ずきん』という童話がどのように変化しているかについて、グループディスカッションを行いました。

個人的な話になりますが、私がドイツの文学・文化に興味をもったきっかけは『ラプンツェル』や『白雪姫』のような幼少期からよく観ていたディズニー映画の題材がドイツのグリム童話に由来していると知ったことでした。高校生の頃から関心を持っていた、グリム童話が他の作品でどう活かされ、変化しているのかということについて大学で講義を受けることができ、貴重な体験でした。

今回の講義はジモーネ・フェスラーさんがドイツ語で話す内容を訳者の小林和貴子さんが日本語で伝えるという形式で行われ、資料も日本語とドイツ語の2つのバージョンがありました。私は通訳なしではドイツ語の内容が理解できませんでしたが、ドイツ語を直接理解しているらしい先生方や先輩方の様子を見て、ドイツ語の勉強へのモチベーションが高まる機会にもなりました。